

「海人」における「聖なるもの」

—『志度寺縁起』の世界から

阿部 泰郎

志度寺は、源平合戦の古戦場である屋島の東、八栗山を隔てた湾の岸辺に在る。寺のすぐ後ろの浜に立てば、北に瀬戸内海が開け、南はなだらかな丘陵が連なる。この寺に伝わる『志度寺縁起』は、七幅に及ぶ大規模な掛幅縁起絵によって絵解きされた、中世の神社縁起のなかでも注目すべき遺例である。七巻の縁起文が勧進帳一卷を併せて伝来する(一九九一年の国立能楽堂特別展示「能と縁起絵」にその全てが出陳された)。縁起の全体は、志度寺の草創から法会の創始と靈験、そして度重なる再興を年代を逐って叙す構成で、その第二「讃州志度道場縁起」が、いわゆる海人の玉取り伝承を中心とする、能「海人」(観世流は「海土」と表記)の拠りとなった縁起である。

縁起の第一「御衣木縁起」は長谷寺の縁起を用いて、本尊十一面観音を漂着した霊木による本願尼園子と童子仏師の造立と説く。そして志度寺は閻魔法王の氏寺であり、本尊十一面と閻王は同体として冥界に通う霊地なのである。第二の「志度道場縁起」は、縁起絵も二幅を用いて説かれるように、縁起の中心をなす部分である。その冒頭は、藤原氏の祖、大織冠鎌足が蘇我入鹿を誅すことから説き起こされる。それは、鎌足の子不比等が父追善の為に興福寺を創建するに至る、興福寺縁起でもある。その供養の為に、大唐高宗皇帝の后となった不比等の妹が寄進した宝物の最たるものが、繞八寸の真向珠(裡に籠められた釈迦三尊を何方からでも拝すことのできる神変奇特の玉)。このいわゆる面向不背の玉が日本へ渡される途中、志度の沖で龍神に奪われる。不比等はこれを取り返す為に身をやつして下向し、所の海人と夫婦の契りを結び一子房前を設け、望みを告げる。請われた海人は、吾が子の為に龍宮へ潜く。この、能一番の眼目である「玉の段」が仕方語りで演ずるところの、海人の玉取り伝承は、舞台こそ志度であるが、潜き上げた玉が興福寺本尊釈迦仏の眉間に納まったと言うように、実は興福寺の縁起説なのである。それは南都における「中世神話」といふべきものであった。この伝承は、『志度寺縁起』以外にも中世の南都周辺で流布していたことが確認されているが、それはやがて語り物として芸能の領域に再び姿を変えてあらわれた。それが幸若舞曲「大織冠」

である。芸能の頂点となる玉取り伝承は、中世仏教における「聖なるもの」としての舍利や宝珠を祀る、それが異界との争奪の果てに人間界にもたらされる「始まり」を語るといふ神話のひとつである。しかしそれが空海や鑿真のような高僧聖者でなく、賤しい海人の女の捨身のはたらきと引き替えにもたらされたと言るところに、この伝承の眼目がある。かの海人は『志度寺縁起』では龍女の再誕と讃えられ、別の伝承では春日明神の化身ともされる。能においてシテの海人が龍女成仏を体現する存在とされるのは、既に宗教伝承の裡で説かれていたことなのである。『縁起』には、言うなれば龍女を本地とする垂迹の海人が立ちたたらき犠牲となることにより、その本誓をあらわすという、一種の本地物的構想が内在する。それは能において見事な実現をみせ、夢幻能の構造の許で往時の因縁を現して最後に成仏得脱の姿を顕現するという基本構想を支える土台であった。特に『縁起』は、海人の靈魂が冥途から声を発し、子の房前に己の追善を求めるといふ独自の要素をもち、それが法華八講の縁起につながる。この、冥からの「詠吟の声」が、能の劇的構成の直接の種子となったのである。それは、夢幻能というユニークな劇様式の生成に、中世の縁起説話が果たした大きな役割を示唆するものである。『志度寺縁起』が語るのは、龍宮という他界との、玉を媒とした海人の往還ばかりでは

ない。この『縁起』は、複数の冥途蘇生譚、つまり蘇り物語を含んでいる。古い順に、白杖童子・松竹童子・千歳童子という三人の「童子」の蘇生記と、最後に『縁起』自体の成立に直結する新しい時代の、阿一という聖の自記の体裁をとる蘇生記の四篇である。前の三篇では、童子という中世社会のなかで（聖）と（賤）にまたがる境界的な存在を狂言廻しとして、現世と冥界を往還させ、本尊十一面観音の垂迹である閻魔法王の教勅を蒙り、志度寺興隆の命を受けて蘇り、約束を果たす。中世に盛行した冥途蘇生譚をふまえ、巧みに利用して説話化し、中世の絶えざる志度寺造営の勸進が唱導される仕掛けである。

『縁起』の成立後も、文明年間の閻魔堂再興勸進が同じ冥途蘇生譚の構造をもって説かれるように、それは志度寺一流の伝統であった。志度寺本尊の観音（閻王）の、現世と冥界（そして極楽往生も）を媒介するはたらきは、冥途蘇生と閻王教勅の真実なることを起請を立てて謳いながら結縁を勧める本願聖によって喧伝され、この海辺の霊場の境界性が発現するのである。冥界から幽魂が現れて僧に生前の因縁や妄執を語る能の基本的な文法は、こうした霊地で再生産される伝承とも密接な関係をもっていただろう。たとえば「善知鳥」の如く、立山の地獄（山中他界）を舞台として生起する、猟師の生業（なまわい）がもたらす墮地獄の苦患を懺悔し救済を願う祈りが片袖に託される。それも霊地独特の勸進唱導の構造の上に

成立した劇であろう。

『志度寺縁起』の中にも、同様な宿業を負った人々が登場して重要な役割を果たしている。能「当願暮頭」として脚色された「当願暮当の縁起」は、白杖童子の冥途蘇生記に続き（縁起絵では同一幅に併せて描かれる）、童子の勸進による志度寺供養の法会の庭での霊験譚として位置付けられる。この砌に参詣した猟師当願（能は暮頭）は、聴聞の間に狩場に心がかげ見仏聞法の志を忘れた咎により生きながら蛇体と変じ、駆けつけた暮頭に背負われて送られ万濃池の主となり、眼をもつて如意宝珠として彼にもたらず。後半は、その宝珠を宇佐宮に献ずる途上で龍宮に奪われたのを、遊女貫主が潜き命を捨てて取り返すという玉取り譚が展開する。それは、『縁起』本篇の玉取り伝承と同巧異曲の、海人が遊女に交替したかたちの伝承である（鎌倉時代の唱導書『普通唱導集』で、海人と遊女とが諸職能の追善句を挙げるのに一具で扱われているように、両者の親縁は中世一般の認識であった）。能はこの霊験譚を現在能として法会の庭を舞台とし、法華供養の場に臨んで蛇体に変身して、後場にはその蛇道沈淪の苦患を救わんが為の祈りに応えて出現した大蛇が、龍女の宝珠に見立てた眼睛の珠を授けて昇天するという、「道成寺」に近い趣である（一九九一年の国立能楽堂による復曲公演では、法会を法華八講として演出して見事な舞台を成就した）。

一念の邪執により法会の中で蛇道に墮し、

却って（聖なるもの）の象徴といふべき宝珠をもたらず当願暮当の縁起が、海人の玉取り伝承を摂り込んでその（聖なるもの）を生成するプロセスを語るように、龍宮という世界に赴いて玉を潜き上げる女人のはたらきは、志度寺の世界像の生成において欠かせぬものであった。それは、冥界と現世を往還して修造再興を勸進する童子に聖にも劣らぬ、むしろより本質的な媒の役割を果たす存在である。『志度寺縁起』に現われ、能に登場する人々は、その生業に身を費し深重の罪業を負いながら、己が営みにおいて現世に（聖なるもの）を将来する、山野河海を遊行し境界を往来する職能民たちであった。彼らを介して獲得される功德（富貴繁昌）を司どり、冥頭の境を宰領する志度寺の観音とは、もはや仏教の菩薩の範疇を越えた民俗的な「カミ」のような存在に変貌している。

「海人」は、そのような『志度寺縁起』をめぐって生成された中世宗教世界の深層に根ざし、その世界像を見事に昇華させた能といえよう。それは、泉鏡花の『歌行燈』にも、たしかに遠く響きあう。芸能―芸道の魔力にとりつかれ、その執念が惹きおこした罪を負ってさすらう主人公は、海辺の湊で因縁の女と運命に導かれるようにして出逢う。そこで女の舞う玉の段こそ、かれの命を尽して伝える（聖なるもの）なのであった。

（名古屋大学教授）